

令和七年早春 蕨市の宝樹院を訪ねて

鎌倉楽しむ会 清藤孝



いつ訪れても、落ち着いた歴史の佇まいを感じさせる「宝樹院」さんを、立春大吉も過ぎた如月の澄みわたる青空に誘われ訪ねました。門前には「蕨城主渋川公墓所」の石柱が目新しくも建てられ、参道には見事に咲始めた白梅には、この時期ならではの「青空と白梅」の可憐な美しさのなかにも力強いコントラストに魅入られ、心の和むものが感じられ、また、参道に祀られる六地藏の立ち姿には、何か現代風なお顔立ちで、心優しく迎え入れられ気持ちや和らぎます。



山門の前には、阿吽の仁王像が立ち、その傍に、蕨市教育委員会の説明板があり、宝樹院の縁起が書かれている。それによると、総本山は、鎌倉の建長寺で、川口芝の長徳寺の末寺となっているという。創建は詳らかではないが、観応 3 年(1352)以前には、既に存



在していたと思われると書かれている。振り返って現在より約800年位前に築かれたことであるが、その頃には、宝樹院の近隣には集落が築かれていたことが推測され、さらに、広島県三原市の賀上晋次(かがみしんじ)家に存在する古文書の「渋川直頼譲状」によれば、同じ年(観応3年・1352)6月には、渋川直頼から「渋川義行」に対し「武蔵国蕨郷上下」領主の移譲が行われ、蕨郷は既に「渋川氏」の領国であることがはっきりと書かれている。(蕨市史・通史編 p128)



境内には、渋川義基公と貞子御台所の墓所があり大切に祀られている。

院号の刻まれた墓石は、江戸時代の文化13年(1816)、蕨城主・渋川公入滅250年忌に当たり、家臣の孫・高橋、今井、町田、山田、河島、貫井、永島、庄野の諸氏らの手により造立された。(蕨市史 p200 参考)

戒名は

渋川公 宝樹院殿英岳俊公大居士 (永禄10年8月23日)

御台所 龍体院殿白山貞性大姉 (永禄10年12月27日)

「蕨城主渋川公戦死略」(庄野家旧蔵)によると、

「智仁勇、三徳の若大将」である渋川左衛門尉正清は、上総三舟山において、上総国の雄・里見義弘の討伐に赴き合戦に及ぶ。軍勢は、第一軍は塚越五郎左衛門勝成、第二軍は岡田織部隼人、第三軍は倉田十郎義康、第四軍は鬼茂忠、第五軍は大将正清が統率し、旗本庄野英左衛門義春を従えて出陣、その勢は三千余騎であった。

ところが、敵の策謀に陥って敗北し、正清は里見軍の将中山三左衛門に首を刎ねられ討死した。この時鬼茂忠は三左衛門を切り付け、主君正清の首を奪い返し、いずくともなく落ちていった。残りの渋川氏兵は大挙して戦死した。敗れ生還した兵達は、その後蕨郷の開発者となっていったという。

龍体院の伝説

渋川氏の御台所は「貞子」と称し、上野国木部村(現在は、群馬県多野郡八幡村大字木部)の豪族、高鼻庄木部判官の女で、新田氏の一族といわれる。

16才で輿入れして、蕨に來た。御台所の伯父は、同国室田村(現在の群馬県群馬郡室田村)の「長年寺」の住持であった関係上、早くから仏教に皈依し、仏教を通じて、処世には深い見識を持っていた。特に、慈悲心があり、部下を愛撫し、農繁期には、自ら田圃に出て、百姓を激励、その労苦をねぎらった。

武蔵の風雲急をつげる永禄十年(1567)には、悲恋のために婚期を逸したといわれる高橋某の女ヒサと、郷里・長年寺に帰り、ひたすら、夫・渋川公の武運長久を祈ったが「戦死」の悲報を聞いて意を決し、ヒサとともに、同年十二月、法華經を右手に高く捧げて、はるか南方蕨の繁榮と、住民の幸福を祈念しつつ、薄幸の佳人は、十九の若さで、夫を慕って「榛名湖」に投身した。これは今から約四百五十年前のことである。

*雨ごいの伝説

渋川公の御台所・貞子は、投身に先だち、蕨地方の農民が水(水害・旱天)に悩まされていたことを、深く憂慮して、蕨の住民に、この憂いあるときは、榛名に來るよう、その願いごとは必ず聞きとどけられると遺言し、投身すると、たちまち龍体となり、湖水深く没した。

侍女のヒサは蟹(カニ)となり、龍体院の御殿である湖を、常に掃除するので、そのために、湖水は清浄であるという。

(引用文献:蕨郷土史研究会・飯田 節先生「渋川時代の伝説」 蕨市教育委員会発刊)



早春のあくまで蒼い天空に向け、その美しさを誇示するかのよう
に咲く白梅には畏敬の念を禁じ
えません。

“東風吹かば

匂いおこせよ梅の花

主なしとて春な忘すれそ

(御詠 : 菅原道真公)

完

令和7年2月16日記